

2016年度教師海外研修(エチオピア) 研修報告書

学校名	名古屋市立南陵小学校	氏名	木下 恵
-----	------------	----	------

<印象に残る写真2点>

●写真1 [4325]

豆洗いからのコーヒーセレモニー

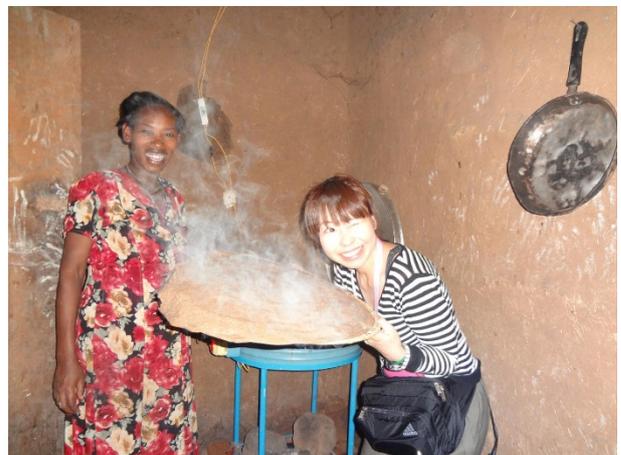
おもてなしの心をコーヒーセレモニーで表してくれる現地の人々。一杯のコーヒーを入れるために、豆を洗う所から始まる本格的なセレモニーにくぎ付けでした。しかし、ここからが飲むまでが長い……。



●写真2 [5829]

初めてのインジェラ作り体験

エチオピアのソウルフード、インジェラを自ら焼かせてもらいました。クレープの要領で生地を鉄板に丸く落とすのが意外と難しい。出来上がったアツアツイインジェラはちょっとおいしく感じたかも？！



1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

この研修に参加した目的は、開発途上国の現状を五感で感じ、そこでの体験を通して、その国の素晴らしさや、支援のあり方、抱える課題などを、自分の言葉で子ども達に伝えられるようにすることである。

現地では、普段の食事、町や村の空気、安全な水のありがたさ、人々の表情など、実際に行かないと感じられないことばかりが、次々と五感を刺激し、全てが教材になりえるものであった。また、訪問先では、そこで出会う青年海外協力隊や専門家の方々の貴重なお話を伺うことができ、支援のあり方について改めて考えさせられた。そして、現地の人々との出会いを通して、1対1で人と向き合い、互いを尊重することの大切さを強く感じる事ができた。

研修を終えて、今、自分が期待する以上のものを得られたと思う。また、それを自分の中できちんと整理し、自分の思いとともに、子ども達に伝えていきたい。

2. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

エチオピアはアフリカの長い歴史の中でも、最古の独立国と言われており、それゆえ、独自の文化が既存する貴重でユニークな国である。ゲエズ文字といわれるエチオピア独自の文字、民族や地方によって異なるたくさんの方の言語、インジェラというクレープのような独特な主食、どれをとっても日本にはないものであり、知れば知るほどおもしろい。しかし、年上を敬ったり、人をもてなしたりする文化は日本と共通するものがあり、親しみを覚える。また、青年海外協力隊の方々や現地の方々との間に生まれた信頼関係により、日本人を歓迎してくれる雰囲気は、私たちに勇気づけてくれた。エチオピアのユニークな文化や現地の方々との温かいふれ合いを通して、エチオピアという国に親しみを感じるようになったことは、まさに肯定的な出会いだと思う。また、それは特に帰国してから強く感じるようになった。オリンピックでエチオピアの選手がテレビに出ると応援したくなり、エチオピアに関するニュースにも敏感になった。離れていても気になる国になったことは間違いない。

（2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

エチオピアには日本に関係するものが結構ある。アディスアベバの道路には TOYOTA と書かれた車がたくさん走っている。また、東芝やブリジストンなど日本のメーカーもあり、日本製の製品は信頼されていてとても人気であると現地の方から伺った。中でも驚いたのは「JICA」という言葉を知っている人が意外と多いということである。日本人ですら JICA を知らない人が少なくないのに、エチオピアの町や村で現地の方々に「JICA」と声を掛けられたことに衝撃を受けた。これは、青年海外協力隊や専門家の方々による地域密着型の支援が着実に浸透している証拠ではないかと思う。日本に対するイメージが良いのも、支援の形が現地の方々に受け入れられているからであると感じた。

また、相手のために時間をかけてコーヒーセレモニーを行うエチオピア人と、日本人との共通文化であるおもてなしの心は、それ自体が、互いの理解を深め合うための大きな共通点であると言える。

（3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

地球温暖化に伴い、CO₂削減は地球規模で考えるべき大きな問題である。とはいえ、先進国が今まで大量のCO₂を排出して発展してきたのに、これから発展を目指す途上国に規制をするのは不公平である。環境に配慮しつつ、発展を遂げるための支援を続けていく必要がある。そこで自然保護を目的としながら、現地の農家の収入を助けるという森林コーヒーのプロジェクトはとても興味深かった。CO₂削減のために、これ以上森林を減らさないようにすることは大切ではあるが、成果の見えにくい、長期的な取り組みに賛同してくれるようにするには、現地の暮らしのことも同時に考えていかなければならない。そこで、森林で育ったコーヒーに付加価値を付けたり、販売する仕組みを整えたりして、農家の生活を向上させることも一緒に進めているらしい。このように、共通の課題に対して、互いに Win-Win になるようなアプローチの仕方を考えていくことが、共に考え越えていくということなのだと感じた。

3. JICA の国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

現地の生活に入って支援を続けているところや、支援が無くなくても自立できるように、現地に現地のリーダーをつくらうとしているところがとても良いと思った。また、よりその国の文化や相手を理解するために、現地の言葉を勉強しているところも尊敬する。一人ひとりが、現地で自分の力を精いっぱい出して活躍している姿に感動した。ただ、今までのやり方で満足している現地の方々もたくさんいると聞いたので、実際、現地の方々はどう思っているのかを知りたいと思った。また、他国の国際協力事業との関わりについても、情報が

あまり入ってこないなので、詳しく知ることができる機会があると良いと思う。日本の支援の仕方と他の国の支援の仕方を比べるのではなく、良い部分を補い合って、現地のためになる事業をこれからも進めていってほしいと思う。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

② 青年海外協力隊（理科教育）活動+ Temenjazyhe Primary School 訪問（子どもとの交流）

【木下／佐藤】

学校に着くと、すぐに集まった子どもたちが大きな声を上げながら手を振って迎えてくれた。みんなとても人懐こく、自分から自己紹介をしてくれた。交流では、折り紙、あやとり、こま、学校紹介、福笑いなど日本の文化を紹介しながらできる遊びを3つの教室に分かれて行った。子どもたちはとてもエネルギーで楽しそうに遊んでいた。しかし、その教室の窓は割れ、床にはゴミが散乱しており、勉強をする環境は決して良くはない。そんな中、青年海外協力隊の方々は、少しでも良い環境で子どもたちが学べるように、授業作りや環境作りに取り組んでいた。高価な薬品に代わるものを提案したり、現地の先生と連携したりして、最終的にはグループ実験ができるようにすることを目標にしていると伺った。エチオピアが、これから中進国を目指し、工業に力を入れていく中で、理数科教育は直接国力につながる大切な要素である。子どもたちが理数科に興味をもち、楽しく学べるよう、日本のサポートがあるのは誇らしいと感じた。（木下恵）

⑧ ジレン No. 2 小学校訪問 【吉田／木下】

エチオピアには多くの民族が共存しており、それに伴い様々な言語が使われている。この小学校では、オロミア語とアムハラ語という二つの言語を使って授業を行っていた。午前中はオロミア語、午後はアムハラ語というように、時間帯で使用言語を分け、先生や生徒も入れ替わるという。公用語がアムハラ語のため、オロミア語の教材が少ないことや理科の実験道具が不足していることなどの問題を抱えていると、現地の先生に教えていただいた。しかし、行っている授業スタイルは日本でも注目されているアクティブラーニングを取り入れたものであった。自分たちで問題を解決することにより、子どもたちは自信をつけることができていると先生は話す。エチオピアの就学率は非常に高いが、途中で退学をする子どもも多い。全員の中等教育までの進学を目指しているというこの学校では、チュートリアルクラスも設けられており、子どもたちの将来のために学校ができることを実践していると感じた。（木下恵）

⑨ 付加価値型森林コーヒー生産・販売促進プロジェクト（森林コーヒー農園、サディ村協同組合）

【木下／佐藤】

どんどん開発され、発展しているエチオピアにおいて、自然を残していくことの大切さには気付きにくい。どんなに自然保護を訴えても、現地の生活の利益との結びつきが見えにくいものでは人は動かない。そこで、森林の保護をしながら、そこに自生するコーヒーを売ることで、現地の農家の収入を上げるという Win-Win の関係を目指すというのがこのプロジェクトである。さらに、森林で採れたコーヒーに付加価値を付けたり、コーヒーを販売する仕組みを整えたりすることで、実際に農家の収入は大幅にアップし、人々の生活も向上したという。自然を保護しながらも現地の生活力を高めるコンセプトは、これからの支援のあり方にとって重要な考え方だと思う。開発と環境破壊がセットで行われてきたこれまでのプロセスから、開発と環境保全を同時に考える転換期を迎えていると感じた。（木下恵）

⑩ アディスアベバ市内教材収集（8/9 スーパー、8/10 JAPAN マーケット、8/13, 8/16 スーベニア ショップ、8/14 スーパー、8/15 シロメダ） 【木下／吉田】

デモが活発に行われていたせい、スーパーに入るだけでも持ち物チェックや身体検査などのセキュリティチェックがあったことに驚いた。スーパーには食料品から日用品まで様々なものが置いてあったが、中でもインジェラ用の家電が目をつけた。また、マーケットには、野菜、果物、衣類、床屋など様々な種類の店が連なっていた。床屋では、客は外で頭を洗い、店員が客の頭に洗面器に入れた水を掛けるというスタイルで、共同作業という感じが新鮮であった。

エチオピアならではの物もたくさんあった。コーヒーセレモニーで使う様々な道具、エチオピア正教に関する道具、民族楽器など珍しい物に目が奪われた。特にコーヒーセレモニーセットは、日本でコーヒーを飲むときに使う道具とはまったく違い、カップの大きさもかわいらしいものであった。コーヒーが苦手な私でも最後まで飲みきることができ、コーヒーを楽しむ余裕さえ出てくるようになった。(木下恵)

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・飛行機での移動が長いので、圧着ソックスや上着があると快適に過ごせる。
- ・あいさつやよく使う日常会話くらいの簡単な言葉を覚えてくると、現地の人と少しでもコミュニケーションがとれる。
- ・薬は必需品。効かないかもしれないが、持って行くだけで心強くなる。
- ・食べ物はそんなにいらなかった。現地の食事がどうしても合わない場合もあるかもしれないが、よっぽどでない限りたくさんの食品の準備は要らない。
- ・みんなで準備するものなどの話し合いの時間はとても少ない。メーリングリストなどを使っても直接話すほどはかからない。日本に居る間に、面倒でも多少集まって時間をとっておくべきであった。

6. その他全般を通じての感想・意見など

- ・行けるチャンスがあるなら行くべき。訪問国のことだけではなく、日本の良い面、悪い面も良くわかる。
- ・人生を変えるきっかけの人に出会えるかもしれません。

以上